

新島・式根島・神津島の爬虫相

大野正男

東洋大学生物学研究室

受付：昭和43年2月6日

Abstract: The Reptiles from the Islands of Niijima, Shikinejima and Kozushima belonging to the Izu Islands, Japan. Masao Ohno (Biology Laboratory, Toyo University, Bunkyo-ku, Tokyo).

In 1967, the author conducted a herpetological survey of the islands of Niijima, Shikinejima, and Kozushima, which belong to the Izu island chain of Japan.

The herpetological fauna of these islands is very poor, and no amphibians occur, but the author confirmed the occurrence of 4 species of reptiles belonging to 3 families, as listed below.

Colubridae

1. *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826) (Niijima, Kozushima).
2. *Elaphe climacophora* (Boie, 1826) (Niijima, Kozushima).

Scincidae

3. *Eumeces okadae Stejneger*, 1907 (Niijima, Shikinejima, Kozushima).

Lacertidae

4. *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838) (Kozushima).

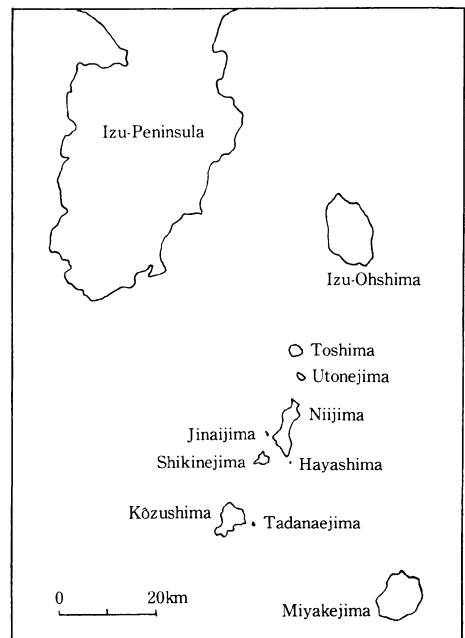
伊豆諸島には、オカダトカゲの如き固有種の分布も知られてはいるが、全般的にみると、その爬虫両棲類相は極めて貧弱であり両棲類にあっては特にその感が強い（八丈島にみられるウシガエル、ニホンアカガエルの如き移入種が知られるだけで、在来のは全く産しない）。しかし、ファウナは貧弱であるといわれているだけで、一部の島を除いては、その実態はあまり適確に把握されていない。幸い筆者は、昆虫調査の目的でこれらの島々（大島、新島、式根島、三宅島、八丈島）に渡り、昆虫調査と併せて、両棲類、爬虫類等の分布状態も調査する機会を得たので、ここには、1967年6月に試みた、新島、式根島、神津島の調査結果をとりまとめて報告しておくことにしたい。

本稿を草するに当たり、種々有益なご助言をいただいた、東海大学教授岡田弥一郎博士に対し深謝する。

1 調査概要

新島、式根島、神津島は、大島から八丈島を経て鳥島にのびる富士火山脈の主脈に入らず、大島より南西の方向にそって、別個の島弧を形成する島嶼群で、地質学的にも、その大部分が、流紋岩質の熔岩ないし火山抛出品により構成され、玄武岩安山岩質の熔岩からなる主脈上の島嶼群とは、著しくその趣を異にする。

新島：新島は、大島の南南西約45km、また、伊豆半



1 図 新島・式根島・神津島の位置概念図

島下田の南東約40kmの太平洋中に位置し、島の中央部で34°23' N, 139°16' Eを示し、長径約11.5km、短径約2 kmの南北に細長い形をした、面積2,546ヘクタール

ばかりの小島嶼である。附近には西方1 kmに位置する地内島と、南端より500mへだてて位置する早島との2無人島がある。

島には新島山(234 m)、宮塚山(428 m)、大三山(130m)、向山(300m)の4つの山塊が南北に連なるが、その中、宮塚山と大三山、あるいは向山との間には、かなり広大な低地帯が展開する。

中央の低地帯は耕地が拓かれ、自然状態の保存はあまりよくなく、また、向山方面も、山の形成が比較的新しいためか、樹木の生長がやや劣り、森林の発達はあまり良好でない。しかし、宮塚山一帯は、樹木の生育よく、かつ植物の種類も多く、陸棲動物の棲息地としては、かなりよい環境を形づくっている。

筆者は1967年6月1日より3日の午前中にかけて、島の北部を除く各地を踏査することができた。島には陸水が乏しく、宮塚山周辺に僅かな湧水を見るだけで、両棲類は全くみられなかった。しかし、オカダトカゲは各地、特に本村周辺に多く、またシマヘビ(宮塚山および向山で各2頭目撃)、アオダイショウ(向山方面で3頭)もよくみられた。

式根島: 式根島は、新島の南西3 kmのところであり、面積448ヘクタール、最高地点でも僅か105mにすぎない平坦な小島嶼である。島の中央部は開拓されて耕地となっているところが多いが、西南部には自然林が多く、また、耕地のある地域でも、ゆるやかに続く丘陵部には、残された自然林が随所に認められる。

筆者は1967年6月3日の午後から5日の朝にかけて、島内の、略全域を調査することができた。新島には、僅かではあるが陸水があったが、式根島には全くなく、したがってまた、両棲類は全く棲息しない。爬虫類では、オカダトカゲがかなり多く、また、アオダイショウも認められた。なお、島の中央部で、石垣中に入り込むシマヘビと思われるヘビの尾部をみたが、はっきり確かめることができなかった。

神津島: 神津島は、式根島の更に南西にあり、新島からおよそ24 kmはなれ、伊豆諸島の住民島中、最西端に位置する島で、その中心部で139°9' E、34°13' Nを示す。西南5 kmに恩馳岩礁、東方2 kmには無人島祇苗島を伴う。島は、北北東から南南西にかけてのびる逆ひょうたん形を呈し、長径6 km、東西3 km、面積約1,835ヘクタールで、海拔574.2mの天上山と、それを囲む300m内外の峯々、それに北端の神戸山(268m)、南部の高処山(304m)、秩父山(282.9m)など多数の山々を配し、全島ほとんどが山地によって形づくられている。

筆者は1967年6月5日から7日の午前にかけて、東部の観音堂方面を除き、略全域を踏査することができた。島には、天上山山頂の不動池(雨が降らないと水がなくなる)をはじめ、山腹や周縁部には僅かながら流水もあり、新島、式根島、神津島の3島の中では、最も陸水に恵まれた島といえるが、その水量は少なく、両棲類は全く認められない。しかし、樹木の生育は3島の中で最もよく、陸棲動物の棲息環境としては、かなりよい条件を具えている。爬虫類では、新島、式根島にみられたオカダトカゲが多く、またシマヘビも少なくなく、秩父山方面、高処山々麓、天上山々麓などで合計5頭を観察した。アオダイショウは、天上山々麓の那智山と高処山西麓で、成蛇各1頭をみ、更に、天上山北麓のツヅキ堂に向う道路上で幼蛇1頭を捕獲した(第3図)。この他、カナヘビの棲息もみられ、秩父山方面で3頭、ツヅキ堂方面で1頭を認めることが出来た(第2図)。

II 新島・式根島・神津島産爬虫類目録

今回の調査で分布の確認をした種類

Colubridae ヘビ科

1. *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826) シマヘビ
分布: 新島, 神津島。

2. *Elaphe climacophora* (Boie, 1826) アオダイショウ
分布: 新島, 式根島, 神津島。

Scincidae トカゲ科

3. *Eumeces okadae* Stejneger, 1907 オカダトカゲ
分布: 新島, 式根島, 神津島。

Lacertidae カナヘビ科

4. *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)
カナヘビ 分布: 神津島

III 考察並びにまとめ

1) 今回の調査で確認できた爬虫類は、アオダイショウ、シマヘビ、オカダトカゲ、カナヘビの4種で、これを島別にみると、新島3種、式根島2種、神津島4種となる。

2) 種類は少ないが、個体数は決して少なくなく、オカダトカゲ、アオダイショウ、シマヘビなど、いずれもかなり豊富に棲息しているように思われた。

3) アオダイショウとオカダトカゲは各島に共通で、また、シマヘビも、式根島でそれらしいヘビをみているので、前種同様、共通的に分布している可能性が大きい。しかし、カナヘビは、神津島には決して少なくないのに、他の島では全くみることができなかった。



図2 神津島産のカナヘビ

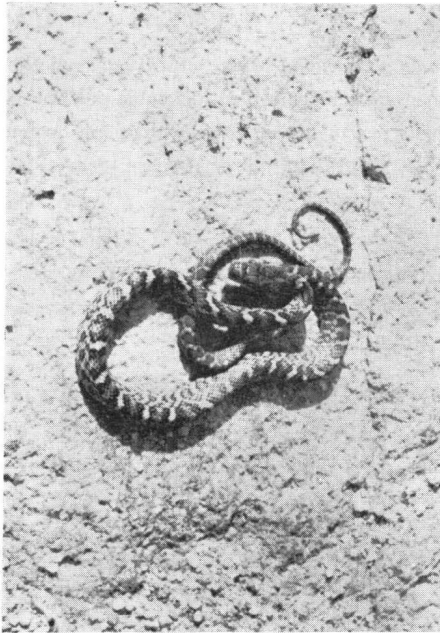


図3 神津島産のアオダイショウ(幼蛇)

本種が神津島だけに分布し、他の島に産しないとすれば興味深いことである。

4) 八丈島にまで分布するマムシは、いずれの島でも全くみられなかった。神津島では6月5日が雨で、翌6日が晴れ上り、マムシの昼間出現には特によい条件がそろっていたにもかかわらず、遂に1題もみること

とができなかった。島民に聞いても、みたことながないことなので、これらの島には分布しないと考えてよいであろう。

5) 神津島の東方2 kmの海上にある祇苗島は、別名ヘビ島の名で呼ばれ、ヘビの多産地であるといわれている。今回は渡島できなかつたのでヘビの種類は確かめられなかつたが、附近の島のヘビ相から考えると、シマヘビかアオダイショウである可能性が強い。^{*} 島民の話では、海鳥類の卵やヒナが主食であるということであるが、海鳥の繁殖期以外には何を餌にしているのであろうか。生態学的に研究してみたら興味ある成果が得られるかもしれない。

参 考 文 献

- Goris, R. C. (1967) The reptiles and amphibians of Hachijojima islands, Acta Herpetol. Jap., 2 (3), pp. 25~30.
- 木場一夫 (1955) 日本の爬虫・両棲相, 日本生物地理学会々報, 16—19, pp. 345~354.
- 中村健児・上野俊一 (1963) 原色日本両生爬虫類図鑑, pp. 1~214 (保育社)。
- 岡田弥一郎 (1921) 大島近海採集旅行記, 動物学雑誌, 33 (387), pp. 30~34.
- Okada, Y. (1939) Studies on the Lizards of Japan III, Scincidae, Sci. Rep. Tokyo Bunrika Daigaku, B (72-73), pp. 159~214.

^{*} 観光案内書ではシマヘビとアオダイショウの両種が分布することになっている。